



Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（人間文化）
報告番号	甲第1543号
学位記番号	第23号
氏名	柴田 憲良
授与年月日	平成 28 年 3 月 25 日
学位論文の題名	日本初期天台宗における中国仏教の受容と展開 On the Reception and Development of Chinese Buddhism in the Early Japanese Tendai school
論文審査担当者	主査： 吉田 一彦 副査： 山田 敦, バスキンド ジェームズ

博士論文審査及び最終試験結果報告書

2016 年 2 月 12 日

審査委員(主査) 吉田一彦

名古屋市立大学大学院学則第 14 条及び名古屋市立大学学位規程第 10 条に基づき、
次のように博士学位論文審査及び最終試験結果を報告します。

- 1 審査委員の補職及び氏名
別紙 1 のとおり
- 2 審査に係る学位授与申請者及び論文の表題
別紙 1 のとおり
- 3 学位論文の内容の要旨
- 4 学位論文審査の要旨
別紙 2 のとおり
- 5 最終試験の結果の要旨又は学力確認の結果の要旨
別紙 2 のとおり
- 6 学位授与についての意見
別紙 2 のとおり

(別紙1)

1 審査委員の補職及び氏名

委員区分	補 職 名	氏 名
主査	教授	吉田一彦
副査	教授	山田敦
副査	准教授	ジェームズ・バスキンド
副査		

* 人間文化研究科教員でない場合は、補職名欄は所属・補職名

2 審査に係る学位授与申請者及び論文の表題

申請者	学籍番号	124802
	氏 名	柴田憲良
	指導教員	吉田一彦
	副指導教員	山田敦
申請に係る 学位論文の表題		日本初期天台宗における中国仏教の受容と展開 On the Reception and Development of Chinese Buddhism in the Early Japanese Tendai school

(別紙2)

3 学位論文内容の要旨

本研究は、最澄の大乘戒独立運動に関連する諸思想について、中国仏教およびインド仏教の諸様相からの影響関係を検討するとともに、仏教思想史、歴史、教学、美術史など諸分野の研究成果を踏まえ、多角的な視点からの考察を試みたものである。

第一部においては、最澄と不空の文殊上座制に関わる思想について、その共通点と相違点を明確にすることで、最澄の文殊上座制提唱の意図を解明した。

第一章では、不空が提唱する文殊上座制の理由について検討した。不空が提唱した文殊上座制は、賓頭盧の上座に文殊菩薩をまつる制度である。筆者は、この設置形態が北周武帝による廃仏の表明文の一節を遠因としたものではないかと考え、不空の皇帝観について考察した。不空の住持した大興善寺の前身は、北周の廃仏後、隋の復仏にあたって一時的に設置された菩薩僧が住む陟岵寺であった。そこから、不空は北周の廃仏と隋の復仏に関する知識をもっていたと考えられる。不空は、自らの時代、廃仏を回避しようと意図し、積極的に皇帝に仏法興隆を付嘱して、「大乘」に基づく国家統治を勧めていった。その上で、不空が宣揚する「大乘」の内実について、国家の息災と国王の守護という護国思想の観点から考察した。

第二章では、不空の文殊上座の設置形態と文殊像の像様を検討して、それと最澄の文殊上座の設置形態と文殊像の像様について比較検討を行った。また、中国における聖僧供養の原初形態、その後の中国における展開、そして日本への導入と展開について検討して、最澄の文殊上座制の主張の理由について考究した。不空の文殊上座は、賓頭盧像の上座に菩薩形の六字文殊像を併置したと考えられているのに対して、最澄の文殊上座は、一向大乘寺には文殊像を単体で設置し、一向小乗寺には賓頭盧像を単体で設置して、布薩においては大乘戒と小乗戒を区別して、それぞれの場合に応じて文殊と賓頭盧を上座に安置するという形態であった。最澄の説く文殊像の像様は、僧形である。最澄は、賓頭盧が本来空座の設置であることを根拠として、食堂の上座に安置されてきた僧形像は文殊像であると論じた。しかし、中国では聖僧像は画像・塑像として造形化されており、日本でも最澄以前から聖僧像として造像されていた。ここから、最澄が従前の賓頭盧像をそのまま文殊像であると解釈したため、僧形文殊像が創出されることになったと論じた。さらに、本章では、不空と最澄の文殊菩薩に求める功德の相違について考察することで、最澄の文殊上座制が単受大乘戒に関連して説かれたものであることを解明した。

第三章では、『延喜式』にみられる宮中儀礼と諸国金光明経齋会における聖僧像の有無について検討した。第二章の日本における聖僧供養をさらに詳論したものである。正月最勝王経齋会、春秋二季御読経、御仏名、一代一講仁王会における聖僧は、『延喜式』の表記法から、

聖僧の像が安置されず、聖僧の座のみが空座として設置された。こうした聖僧の空座での設置は、中国における聖僧供養の原初形態と一致するものである。一方、八世紀前半の諸国金光明経齋会では、聖僧像が安置されたと推測した。さらに、諸国金光明経齋会で用いられた『合部金光明経』に説かれる聖僧に注目し、『金光明経』翻訳の史的展開を考慮して、真諦訳から聖僧に関する記述がなされたと考察した。

次に、第二部においては、最澄における末法観および仏法興隆について、中国仏教文献の検討を通して明らかにした。

第四章では、最澄が大乘に分類した「大乘上座部」と小乗に分類した「上座部」に関して、中国仏教文献に限定せず、可能な範囲でインド及びスリランカの仏教を取り巻く諸様相を検討して、単受大乘戒を主張する最澄が、なぜ小乗の「上座部」と比叡山や天台法華宗を同一視したのかについて考察した。本章では、玄奘『大唐西域記』所載の「大乘上座部」がスリランカの上座部の中でも親大乘派の無畏山寺を中心とした部派であることを明らかにした。最澄は、『大唐西域記』から大乘の「上座部」の存在を学び、「上座部」を小乗国に分類する一方で、純大乘を標榜する比叡山や天台法華宗を「上座部」に相当させる議論を行った。最澄は、釈尊入滅後百年頃起きた根本分裂の最初期に成立した「上座部」こそ、少数派であれ、釈尊の系譜を正統に引く部派だとして、天台法華宗に相当させた。一方、分裂の原因を作った大天を中心に成立した大衆部は、多数派とはいえ、滅法の先兆であるとして南都の僧綱に相当させた。奈良から平安へと遷都して、桓武天皇による奈良仏教の統制が実施され、奈良仏教に変わる仏教が求められる時代の移行期に際して、最澄は日本でも根本分裂が起こり、「上座部」と「大衆部」のように、比叡山を中心とする天台宗と南都の諸宗とに分かれたと認識していた。本章では、主体的に分派活動を行う最澄の思想の特質を明らかにする。

第五章では、中国の北周末隋初に設置された「菩薩僧」に見られる時間観念、および「末法」の世から「仏法興隆」を果たした隋の文帝の仏教思想について考察した。北周の武帝による廃仏政策は、僧侶に「末法」の世の到来を認識させる象徴的事件であった。しかし、「末法」の最中でも「仏法興隆」や「像法再興」を願って活動する「菩薩僧」の存在が見られた。また、僧侶から皇帝に対して「末法」の世から「仏法興隆」を実現させようとする意図が見られ、文帝自身にも「仏法興隆」を果たすという自覚が見られた。宣帝と文帝は、復仏政策の最後に菩薩僧を設置した。菩薩僧は、鬚・髪を剃らず、嚴服・菩薩衣冠を着すという出家僧とは正反対の形姿であった。本章では、終南山で隠棲した法蔵という人物に着目して、彼の思想を検討した。そこで明らかになったのは、文帝が求めた菩薩僧は、山林修行を実践し、持戒清浄で、徳行高き僧侶であり、『法華経』に基づく理念が見られることである。また、文帝と僧侶の山林に対する認識を考察し、末法と山林修行の関係について検討した。

第六章では、最澄の末法観の思想的背景について検討した。本章では、『顕戒論』において

統一的に使用される「像末」の語義について検討した。最澄が「像末」概念を用いるのは、南都の僧綱の反対によって「回小向大式」が未実施となっていることに対する批判であった。最澄は、天台法華宗の菩薩僧は、「像末」から「仏法中興」をなしとげることが可能だと主張した。これは正法→像法→末法と、順に衰退していく時間観念ではなく、一度「末法」の世が訪れたとしても、「像法」や「正法」の世に戻ることができるとする時間観念である。筆者は、そうした時間観念が、北周末隋初の「菩薩僧」に見られる時間観念と同一のものではないかと考え、両者を比較、検討した。また、インドの初期大乘經典には、大乘仏教徒が小乗仏教徒に対して「法滅」の状態に陥っているとして批難する部分が見られ、また吉蔵には部派分裂によって異部が生じた段階を「像法」と捉え、大乘仏教を「正法」と捉える思想が見られる。こうした初期の法滅思想やその後展開された末法思想には、本来的に批判対象が設定されており、自己を正当化する際に「正法」が回復されるとする論理が内包されている。最澄は、末法思想に内包される時間観念を活用して、南都の僧綱が支配する仏教界を「像末」の現れだと批判し、単受大乘菩薩戒による完全な大乘仏教を実現することが、「正法」の回復につながるとする思想を提唱した。

第七章では、最澄が南都の僧綱の存在を「末法」の表れであるとしたこと、および「正法」の回復に何を必要と考えたかについて検討した。最澄は、南都の僧綱による僧侶の統制と、僧籍の編成による僧侶の管理が行われている現在は、『仁王經』に説かれる「末法」の世だとし、両制度の廃止を訴えた。現在が「末法」だから、天台法華宗の菩薩僧に比叡山での山修山学を課すとする論理は、北周末隋初の菩薩僧にも共通するものであった。そして、最澄が「末法」と比叡山を結びつけたのは、聖徳太子の慧思後身説と靈山同聴説を教理的な根拠とするものだと論じた。最澄は、比叡山を靈鷲山に見立てて、比叡山で釈尊が『法華經』を説法している現在が「正法」の世だとする思想を説いた。そうした「正法」の世を実現するには、得度授戒制度の改正が必要である。最澄は、『法華經』「安樂行品」に説かれるように、小乗の声聞に近づくことなく、比叡山において一貫して出家得度、授戒、山修山学が行えるように朝廷に制度改正を求めた。最澄は、得度の実施日を桓武天皇国忌日に設定したが、その理念的根拠は、桓武天皇が『法華經』と天台教学の興隆を付嘱された天皇であり、崩御後には「像末」の世が訪れたという理解に立つものであった。最澄は、『梵網經』と『仁王經』が「末法」の世を説く經典であることから、この両説を南都の僧綱を批判する目的で用いていた。さらに、『梵網經』をはじめとする菩薩戒の受戒作法には、釈迦牟尼仏から戒を直接受ける自誓受戒のことが説かれており、これは比叡山に『法華經』を説く釈尊を現出させるとする考えと共通する思想に立っていることを明らかにした。

4 学位論文審査の要旨

本論文は、最澄の思想を解明することを目的に、最澄が入唐して学んだ中国の仏教やインドの仏教にまで遡って研究した意欲作である。最澄の戒律思想は最澄以後の日本仏教を大きく規定した重要な思想である。しかし、最澄の戒律思想は、独自性の強い思想であって、それをどう理解すればよいのかについてはいまだ定見がない研究状態であり、特に、その思想的な淵源はこれまで不明であった。本論文は、それを中国の南北朝末期～隋初の北周武帝による廃仏および隋の文帝による仏法再興の時代の思想に求め、最澄の思想の源流について新説を提示した。最澄が説いた菩薩僧は、この中国の北周末・隋初の菩薩僧から理解すべきだと説くのである。そう理解すれば、最澄が山における修行を重視したことも理解できるとする。これは優れた研究成果と評価されるだろう。

本論文では、またこの問題を解明するために、最澄の末法思想を詳細に分析している。そして、『顕戒論』などに記される最澄の末法思想は、末法になった時代を再び正法の時代に戻すことができる、つまり時間を巻き戻すことができる、いや我々は時間を巻き戻して正法の時代を再興しなければならないと説くところにその特色があったと論じる。『法華経』の思想では、釈迦は時間を超えて永遠に存在するブッダであり、最澄が寺院を建立した比叡山は釈迦が法華経の教えを説いた霊山に等しい山であり、したがって、比叡山の仏教が認められ、発展すれば、比叡山においてブッダの真の教えが説かれ、正法が復活するというものであったという。

本論文では、このように斬新な視座から最澄思想の分析がなされ、新たな最澄像が提示されている。博士論文として水準に達したすぐれた論文と評価される。

本論文は、序論と二部七章から構成されているが、そのうちの五章分はすでに学会誌に発表されたものであり、また序論の一部は、著書（共著）に発表されたものである。このうち天台学会の『天台学報』に発表された論文 3 本に対してすでに天台学会賞が授与されている。このように本論文は学会から高い評価を受けている。ここからも博士論文として十分な水準に達したものと判断される。

5 最終試験の結果の要旨又は学力確認の結果の要旨

最終試験は、2016 年 2 月 1 日午前 10 時より、705 セミナー室にて 75 分間実施された。最初に学位申請者から論文の概要、研究の目的、視座、方法などについての説明がなされ、

その後、質疑応答が行なわれた。

最初に、バスキンド委員から、最澄の時間観念について、彼が時間を巻き戻すことができると考えていたとする理解はこれまで聞いたことがない新説で大変興味深い。そもそもインドには末法思想は見られるのか。また不空の末法観念はどうだったのかという質問がなされた。申請者は、インドには正法・像法・末法の三時説は見られない。また、不空には「法滅」概念も「末法」概念も見られないとの解答がなされた。次に、最澄は、どのようにすれば正法に戻すことができると考えていたのかとの質問がなされた。申請者は、最澄は戒律を護持すること、すなわち持戒によって時間を正法に戻すことができると考えていた。そして、釈迦が再び出現すれば正法が回復でき、釈迦から直接に戒律を受けることができると考えており、比叡山こそがその場になりうると主張していた。それは『法華経』『梵網経』を経典的根拠とする思想であった。ただ、現象的・社会的には、新興の天台宗が南都の諸宗から批判され、妨害されていることを「末法」ととらえていたものと考えられると解答した。次に、不空の政治性について、不空の教説は当時の皇帝に対して説得的であったのか、また不空の政治的な権力は相当なものとするべきなのかとの質問がなされた。申請者は、不空は玄宗、肅宗の時代はまだ力がなかったが、代宗の時代になると、皇帝の信頼が大変厚く、大きな政治的権力を持った。代宗の時代になると、不空の上表文がすべて認められていることからそれがわかる。それゆえに、不空自身は深刻な末法意識を持つことがなかったと解答した。次に僧形文殊について、最澄が従前からの賓頭盧像を僧形の文殊像と見なしたのは混同だったのかという点について論旨の確認がなされた。申請者は、『顕戒論』では、袈裟や髪形について議論がなされており、出家した菩薩僧など、僧の形をした菩薩がいることが指摘されており、これと僧形文殊の理解とが繋がっているのではないかと解答がなされた。バスキンド委員からは、優れた論文である。誤字や変換ミスのような単純ミスもなく、最澄の時間観念についての重要な新見解が提示された論文である。また僧形文殊像の成立についての新説も評価できるとのコメントが述べられた。

次に、山田委員から、『不空表制集』について、この書物が早く宋代に散逸してしまったのはなぜかとの質問がなされた。申請者は、唐の武宗による「会昌の廃仏」（円仁の『入唐求法巡礼行記』に詳細な記述が見える）の影響があるのでないかと推定しているが、その詳細については今後の課題としたいとの解答がなされた。次に、「靈山同聴」に関する史料について、これについてはすべて『叡山大師伝』を史料に用いて議論がなされているが、この史料の信憑性は確実なものといえるかとの質問がなされた。申請者は、『叡山大師伝』は最澄の死の直後に弟子によって書かれたものであり、最澄の思想をかなり伝えるものと見てよいと評価しているとの解答がなされた。

次に吉田委員（主査）から、聖僧像について、『合部金光明經』の記述を発見したことは重要な発見である。奈良時代の日本でこの經典はどの程度用いられていたと考えるかとの質問がなされた。申請者は、奈良時代の史料には金光明系の經典の卷数に関わる記述しか見えず、手がかりが乏しいが、一定程度用いられていたと推定されるとの解答がなされた。次に、病氣直しについて、奈良平安時代には般若系の經典が病氣直し、疫病封じの力があると考えられており、『金剛般若經』『大般若經』『般若心經』『仁王般若經』が重視されたが、最澄の場合は南都とは異なり、もっぱら『仁王般若經』を用いたのかとの質問がなされた。申請者は、『仁王般若經』が中心であるが、光定の『伝述一心戒文』には、金字にて『金剛般若經』を書写したという記事が見えるから、『金剛般若經』も用いていたと考えるとの解答がなされた。次に時間を巻き戻せるとする思想について、吉蔵の思想はどうなっているか、また最澄は吉蔵に言及するのかとの質問がなされた。申請者は、吉蔵は『法華經』の久遠の釈尊、永遠のブッダの思想に基づいて、「正法」が新たに生まれると考えていた。そうした思想は智顗には見られないものである。ただ、最澄は吉蔵は引用しないと解答した。次に、今日の仏教学の研究水準からすると、『梵網經』『仁王般若經』は中国撰述の疑偽經典と考えられるが、最澄はそのことを認識していたのか。認識せずに重視したのか、認識した上で重視したのかとの質問がなされた。申請者は、最澄は『仁王般若經』の僧官批判の部分は引用するが、『梵網經』の該当部分は引用していない。最澄は、よく知られているように『梵網經』に基づく戒律を主張した。最澄の僧官批判の記述をめぐる引用の仕方から考えて、認識していた可能性があるとの解答した。吉田委員からは、この博士論文は最澄について新たな見解を提示した意欲作であり、優れた論文と評価されるとのコメントが述べられた。

最後に今後の研究の方向性について質疑応答があり、最終試験は終了した。

6 学位授与についての意見

以上の学位論文審査と最終試験の結果に基づき、審査委員は一致して博士（人間文化）の学位を授与するのがふさわしいと判定する。